

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

関西弁「そやな」夫婦円満に

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



知人の会社の忘年会は、年末も押し迫ったところ、事務所の三つの部屋を開放してワイワイやるのが恒例です。「はじめまして」と名刺交換から始まりですが、出版社だけあって多士落々、いろいろな職業の方がお見えです。座る席も自由なので、人見知りする私は目立たないように隅っこでちびちび飲みながら話を聞いているのが常です。



ある年のこと、偶然ですが、関西弁をしゃべる人の多いテーブルに座ってしまいました。北海道出身ながら長く関西の大学で教壇に立っていた男性は、上手な関西弁を話します。大阪を出て北海道で新聞記者をされていた方は、声も大きく自信にみなぎっています。紅一点は作家で、これまた関西弁全開、とぼけた味わい深い語り口で、大いに笑わせてくれます。

お三方とも大先輩。それも大きな声で関西弁を話すものですから、気づいたら若手をはじめほかの方は別の部屋へ避難したようで、その部屋には関西弁と陽気な笑い声が飛び交っていました。関西弁には空間の雰囲気を生耳ってしまいう迫力がありますね。北海道では、ちょっと引かれる面があるかもしれません。

私も大阪出身で、大阪に兄弟や親戚はいますが、両親も亡くなったのでめったに行く（もう「帰る」とは言わない）ことはありません。しかし、電話で親戚や友人らと話すとお互い話すと大阪弁になります。札幌にいる友人と話するときもすぐに大阪弁が出てきます。



昔、全国を旅しましたが、その地の言葉をすぐ覚え、まねをしては、土地の人間と思われるのを面白がっていました。その力がある若いうちに外国に行っていたら、英語など外国語に堪能になれたかもしれないと思うと、ちょっと残念な気がします。

先日、作家の田辺聖子さんが91歳で亡くなられました。本紙の記事で97歳の瀬戸内寂聴さんのお悔やみを読んで、「お二人ともすごい」と、その年齢に感動しました。

天声人語では、田辺さんの随想集の一節が紹介されました。「夫婦円満に至る究極の言葉はただ一つ、『そやな』である。夫からでも妻からでもよい。これで世の中は按配よく回る」と。それを読み、自分の大いなる心得違いに気づかされました。

私は、いつも「なんでやねん」と発していたので、自説を押し付けているように聞こえたかも知れません。これはうまい作戦ではないし、少しとげもあるようです。そりゃ、北海道生まれの女房は嫌だったに違いありません。これからは、「そやな」とワンクッション置いて、最善手をこっそりと探そうと思います。